

・創造性であり、園で行われたテストや測定の結果を利用したものもあったが、実際に観察や実験を行ったものもある。娘が集めて来た絵はテーマのあるものと自由画の2種類で、すべて説明して絵を画かせクラス27人に1人ずつ話をさせて回収するという方法をとったようである。これらの250枚をこすおびたらしい絵をカメラにおさめるのが亦一仕事で、バカチョンカメラばかり愛用していた娘は大型のカメラの操作を父親からたゞきこまれ、ダイニングの壁にラシャ紙をはり、三脚をすえて一日がかりで撮影したが、この他に大学の接写の設備を利用させて頂きもした。

クラスの中から造形活動の得意な子と苦手な子をそれぞれ5人ずつえらび、実験や測定の結果を勘案して結論を導き出して行ったようであるが、実際に論文の執筆がはじまったのは10月に入ってからのものであった。先生は週に一度時間を作って相談にのって下さったり、書きためた草稿に目を通して下さりもしたようで、先生からお電話を頂くこともあって恐縮したことであった。こうして12月19日の夜というより20日の明け方になって180枚に及ぶ卒業論文が完成したのであった。

娘の出した結論は大ざっぱに云えば造形活動の得意な子供には社会性に乏しく運動能力も劣っているが創造性は豊かであるという共通性があるのに対し、苦手な子のグループには創造性が乏しい事以外には顕著な共通性は見られない、ということのようである。

卒業後は大学院進学を勧めたが、娘は一度現場に出て卒論の結果を応用してみたいと云い、採用試験を受けて合格してしまった。かゝる上は娘の意志を尊重せずばなるまいと思う昨今である。

## 地理学史の中の「お茶の水」

千葉 徳 爾

お茶の水というのは地名なのだろうか。なるほど大学の名でもあり、国鉄の駅名でもある。しかし、東京都の地名には、どの地図を見ても載っていない。もちろん、橋のたもとの交番の傍には僅かな空地に滴々と流れる泉があって、これがお茶の水の由来だと記されているが、これは上水道から導かれたもので、江戸時代からの泉ではない。「江戸名所図會」には「お茶の水・水道橋」という挿画があって、神田上水を懸樋で神田川を渡している所が示してあるが、これは構造物の名で、地名ではないようだ。

人によっては、この神田川の切割の崖から湧く泉の水が清いので將軍や大名の茶の湯の水に用いられたとか、神田川そのものの水が使われたという人もあるようだが、「江戸名所図會」にはそういう事も書いていない。ずっと下流の一石橋の袂にあった大久保主水の門前の井戸が將軍の茶をたてる水に用いられたとしている。しかし、そんな考証は別として私が明治大学で地理学史を講義しながら、いつも言うのはこのお茶の水の堀割こそ、日本の地理教育界ではじめてフィールド・ワークの指導が行われた場所だ、ということである。

中川浩一助教授の「近代地理教育の源流」によると、お茶の水女子大学の前身東京女子師範と東京教育大学の前身東京師範学校が並んで、いまの東京医科歯科大学の敷地を占めていたが、その師範学校の附属小学校で教えていた27才の若林虎三郎が、「付属の小学校の生徒を引率して学校近くの駿河

台などで地形や地層、地下水などを実際に観察させて教えることを試みていたとのことである。」と記している。若林がベスタロッチの理論と自己の体験とによって著した「地理小学」は、中川氏がこれが90年も前の教科書かと思わせるものがあると記したすぐれたものであった。しかし、若林は惜しくも30才で肺結核によって他界する。そしてこの画期的な地理教育も挫折したのであった。

人はよく福沢諭吉の「世界国尽」以来の地理学重視を賞讃するが、それは単に世界の国別知識の暗記にすぎなかった。地理学は地理的知識の暗記詰め込みではないのに、現代に至るまでそのように考えている官吏や事業家たちがあとを絶たないのは、1つには慶応義塾の学風であろう。その証拠には現在に至るまで、慶応大学には地理学科あるいは地理専攻コースが設けられていないではないか。福沢の地理学重視の限界はこんなところにあるのではあるまいか、とんだ横道に入ったが、フィールド・ワークの文化財的存在が、このお茶の水橋附近なのである。だから、かつてそこにあり、今もその名を冠する「お茶の水女子大学」も、当然フィールドを重視しなければなるまい、ということが言いたかったのである。

若林はおそらく、あのお茶の水橋から眺められる断崖を登降しながら、地層や湧水を実地に観察させ、児童たちも眼をかがやせて新しい知識を体験したのであろう。いま、この崖は緑に覆われて、地層は石垣にかくれ、20年ほど前までは何か所も認められた湧水もほとんど見えなくなった。おそらく本郷台が全面的にコンクリートの建物と舗装によって地下水脈が濁れてきたからであろう。一地理学徒として惜しい気がする。

(1980.12.31)

## 地震の講義を受け持って

諏訪 彰

式正英先生の御紹介で、昭和55年度から、地震の講義（地理学特講）を受け持たせていただいている。旧制長野県立諏訪中学校で故三沢勝衛先生に教えていただき、また、気象庁で、35年にわたり、地震・火山活動のいわば臨床医を務めてきた自分の持ち味をいかした講義にしたいと、念願している。

元来、全世界の地震の1割余が狭小で人口過密な日本列島と付近の海底で発生して、しばしば惨害を生じ、特に、死者数では、数ある天災の中でも、断然、トップである。そのうえ、昭和39年の新潟地震で、現代都市の地震に対するもろさが露呈されたのを契機に、故河角広先生が「69年周期説」をかかげて、特に関東南部の震災予防策の緊急性を強く訴え、また、昭和40年に、萩原尊礼先生をリーダーとし、関係の諸調査研究機関あげての「地震予知計画」が発足し、44年に「地震予知連絡会」が創設されてから、この方面の観測・研究は長足に進歩し、かつ、地震に対する官民の関心も急速に高まってきた。

このような情勢の中で、地震予知技術はまだ開発段階にあるが、一部実用化の見通しがついたという前提にたって、昭和53年に「大規模地震対策特別措置法」が施行され、翌54年には、同法に基づく「地震防災対策強化地域」として、まず、東海地方の6県170市町村が指定され、「地震予知情報」～「警戒宣言」が出された場合の防災訓練なども、各地で盛んに繰り返されている。地震対策の画期